天台寺の思い出

本田　耕一

天台寺は岩手県浄法寺町にある格式の高い寺院であるが長い間荒廃していた。縁があって瀬戸内寂聴師が住職を引き受けられ、昭和六十二（一九八七）年五月五日に晋山式が行われた。師は私財を投じ、法話の会を開催し瞬く間に寺を再興した。今では全国から観光客が押し寄せるほど有名になり、師のアイデアで植えられたアジサイが季節には境内で咲き誇る。

寂聴先生が住職になられて数か月後、私は先生にお会いしたくて天台寺に向かった。

私が最寄りの二戸駅で電車を降りた時には夕闇が迫っていた。駅前で客待ちしていたタクシーに乗り込み、「瀬戸内寂聴さんが住職になった天台寺まで」と伝えると運転手は心得たように頷いて車を発車させた。広場を照らしていた照明が見えなくなると、みるみる田舎の寂しさで辺りは暗くなった。

タクシーが緩やかなカーブを曲がるたびに、川岸に生えた木々がヘッドライトに浮かび上がり覆いかぶさるように迫ってくる。数日前の大雨で増水した安比川に沿ったそれほど広くない道をタクシーはスピードを上げながら進む。舗装されているが右へ左と曲がりくねっている。川沿いを離れて山に向かうと道は急に狭くなって、心細くなる。どこも真っ暗でヘッドライトに照らされたところ以外は何も見えない。舗装の途切れたところを少し進み境内の入り口に着いた。車を降りると本堂の明かりが離れたところにぼ

んやりと見えた。足許を確かめながら参道を歩き階段を上ると、開け放たれた本堂の広間から話し声が聞こえてきた。大きな座卓を囲んで談笑しているようだ。近づくと寂聴先生の顔が見えた。私は本堂に直接行き、「遅くなりました」と挨拶をした。

座卓には大皿に盛られた寿司や刺身があり、ビールと見覚えのない銘柄の日本酒が置かれていた。「よく来たわね。上がりなさい」といつもの笑顔で迎えてくださる。先生のほかには男性が三人座っている。卓に座ると隣の男性が「まあ、どうぞ」と、用意されていたコップにビールを注いでくれた。一口飲んで先生のほうに顔を向けると、「こちらは浄法寺町の町長さん、この人が京都寂庵に突然来て、天台寺の住職なってほしいと言ってきた。隣は助役さん。そちらの人は得体が知れないけどコンサルタントかなにかね」とお酒が進んでいるのか上機嫌である。「彼は私が徳島で開いた寂聴塾の塾生で、今は徳島市議会議員をしている本田さん」と紹介してくださる。続けて「この町長さんは今日本で一番若いけど、なかなかのやり手よ。議会であなたみたいに古い議員にいじめられているそうよ。出る杭は打たれるものね。まあ、そんなことはさておき、ゆっくりしなさい」

私は正座を崩して胡坐を組み、肩の力を抜いた。今日は天台寺の復興をどうするかについて内輪の相談会のようだ。様々な話題が取り留めなく話され、浄法寺町の名産である漆の話も出ていた。先生が脱線して、寂聴塾でもよくあったように、ここだけの面白い噂話をされたりして笑い声が絶えない。私にビールを注いでくれた男性は、どうも体が不自由そうである。私の視線を意識したのか、彼は自分から「私は大人になってから、小児麻痺にかかりましてね。歩くのは少々苦労しますが脳は何ともなく、仕事もできているのですよ」とコップの日本酒を口に運びながら話してくれる。五〇代くらいだろうか、痩せて口ひげを生やしている。世の中の裏まで知っていそうな雰囲気だった。それからも和やかでにぎやかな話し合いはいつまでも続き、夜も遅くなり、町長さんたちは暇を告げた。三人が乗った車を見送った後で、私は先生が用意してくださっていた布団を本堂の隅に敷いて寝ることになった。

先生は、「それではおやすみなさい」と、ずいぶんお酒を召し上がったのを感じさせない確かな足取りで庫裡のほうへ行かれた。たぶんこれから徹夜で原稿を書かれるので

あろう。

私は上着を脱ぎ、布団の上に座り、今日の一日を振り返ってみた。

本堂から外を見ると暗闇が広がっている。薄暗い街灯が少し離れた寺の入り口のあたりに見える。それ以外は何もない。車の音や人工的な音は聞こえてこない。微かに川の流れる音がして、虫の声が重なっている。

朝、家を出て徳島空港から羽田に着き、モノレール、山手線を乗り継いで上野駅から二戸駅まで来た。乗り換えとかに思いのほか時間がかかり天台寺に着くのが予定より遅くなってしまった。

寂聴先生に電話したのは三日前。四月の選挙で当選して徳島市議会議員二期目となり半年ほど過ぎていた。初当選は二十九歳。大学の法学部で学んだ教科書通りの議会活動に精力的に取り組んだ。年四回の定例会では本会議、委員会で毎回質問を行い、議会の内幕を地元新聞に連載して評判になったりしていた。私が注目されることへのやっかみなのか、保守革新、党派を問わず私は煙たがられた。正々堂々粛々と市政を監視する議員本来の仕事をしているつもりだった。ところが、年四回の議会で毎回質問できていたのが、無所属議員は年一回に制限されてしまう。個人的に発行している「市議会かわらばん」と名付けた議会報告の内容にも風当たりは厳しい。発言の場を次第に奪われ、追い詰められる焦燥感で、息苦しい毎日だった。

忙しい寂聴先生を煩わせてはいけないと、相談の電話をかけそびれていた。それでも思い切って京都の寂庵に電話をすると、秘書の方が先生は天台寺にいらっしゃると、電話番号を教えてくれた。

寂聴塾生の電話は、すぐに取り次いでくれることになっていたし、手紙で名前の横に寂聴塾生と書いておけば必ず読んでくださり連絡があった。天台寺にかけてみると、直接先生が電話に出てこられて話を聞いてくださった。手短に議会の状況と胸の内を伝えて電話を切ろうとしたら、突然「一度天台寺にいらっしゃい」と言われた。私は躊躇して即答できなかった。距離が遠いこと、環境問題、反原発、ボランティア活動などで予定が詰まっていた。「先生のご都合は」とお聞きすると、これから一週間は天台寺にいらっしゃるとのことだった。

電話を切ってしばらく考えた私は、行ってみようと決断した。直ぐに天台寺の住所を調べ、時刻表を確認した。す

でにあった予定をすべて変更してから、明日の夕方に訪問しますと翌日先生に電話でお伝えした。

目を閉じて考えていたら、久しぶりに飲んだアルコールが回ってきたのか、睡魔に襲われた。布団に潜り込むとそのまま寝入ってしまった。

翌朝薄暗い中で目を覚ますと、境内は一面霧に包まれている。私は本堂から外に出て散歩することにした。ひんやりとした冷気が漂い、まだ目覚め切らない瞼を撫でていく。徳島の湿っぽい海近くの空気と違う。草が遠慮なく繁り、緑の森のように見える。

境内を歩き始めると樹齢百年を超えるような杉の大木が大量に伐採され、変色して朽ちた切り株が次々と目に入る。前の住職が変になって、木を伐って全部売り払ってからお寺が廃れてしまったと、寂聴塾で先生がお話をされたことを思い出した。千本以上が伐採されたらしい。

時折しゃがんで切り株を観察すると根元に苔が生えていたり、名前のわからない木の芽が割れ目から成長していたりする。小道を進むと草の露でズボンが濡れた。どこからともなく鳥の声が聞こえ出し、朝の音が増えていく。太陽が昇り、霧は霞んで視界が広がっていく。夜露も消えていく。ゆっくりと一日が始まっていくのを感じた。

散歩から本堂に戻ってくると昨日の座卓の上に、お寺のお手伝いさんによって質素な朝食が用意されていた。食事が済むころに先生が現れて、卓に向かい合わせで、私の議員としての悩みや葛藤を聞いてくださった。うんうんとうなずきながら聞き終えられた先生は、「まあ大変でしょうが、くじけずに頑張りなさい」と短くはっきりと励ますように言われた。具体的なアドバイスがあったわけではないが、心の澱が取れたように目の前が明るくなった。

次の日に徳島で用事のあった私は、お忙しいところありがとうございましたと頭を深く下げ、帰る用意をした。呼んでいただいたタクシーに乗って駅に向かう私を先生は見送ってくださった。昨晩通ったカーブの多い道を、降り注ぐ日差しの中で車は目の前に現れる木々を追い越していくように走った。来るときの心細く長かった道のりが明日に続くハイウェイのように思えた。

二戸駅から電車を乗り換えながら東京に着くころには、政治や選挙の現実と理想との葛藤の渦が鎮まり、自分の思う道を迷わずに進めばいいという確信のようなものが湧いてきた。